ラブ・フォーティ
テニスに魅せられて　徳弘晴輝
コート持つ夢を実現　⑱

高知ローンテニスクラブに入会してからは、練習が面白くて毎日コートに通っていました。テニスは見るとするとは大違いで、多くのスポーツの中でも、難しい部類に入ると思います。

その時私は 24 歳と若く、卓球とテニスは共通点がたくさんあるので有利でしたが、当時のトップ選手であった中川義隆さん(50 歳)、井本正一さん(45 歳)には、2 年間どうしても勝てませんでした。テニスは技のウエートが高いので、体力とスピードだけでは勝てないスポーツです。

そして 2 年後にやっと県のチャンピオンになりましたが、そうなると国体四国予選に出場しなくてはならなくなりました。「テニスは楽しみとしてやる」と決めていたのに、それをすっかり忘れて選手になっていました。

出場してみると県外の選手は強くて、それから 18 年間は出ては負け、出ては負けが続きました。そして 42 歳になった年に、四国から２県出場できることになったので、初めて三重国体に出場できました。その時のメンバーは、一般が久保徳康、徳弘晴輝、壮年（４５歳以上）が安岡要、井本正一さんでした。結果は１回戦で宮崎県に完敗しました。

その国体は昭和 50 年の秋でしたが夏の台風でクラブのコートが流されて、満足な練習ができない状態でした。国体帰りの汽車の中で、安岡・井本両先輩に「前々から自宅の隣にテニスコートがあれば、いつでも自由に練習が出来るので、いつの日かコートを持ちたいとの夢をもっている」と話したことでした。

流されたコートは復旧しましたが、次の年にまた台風が来て、今度は川幅の拡幅のため再建が出来なくなりました。そこで県が代わりの土地を西新屋敷に用意してくれましたが、地元との協議が長引き、すぐには建設の見通しが立たなくなりクラブ員は不自由をかこっていました。

話は変わりますが、当時私の家族は夫婦と娘３人，そして母の６人家族でした。妻は朝５時に起きて、朝食と３人分の弁当を作り、８時半から５時まで市役所で勤めて、家に帰っても、掃除、洗濯、食事の準備と、忙しい毎日でした。当時の私は、恥ずかしながら仕事とテニスだけをしていました。

その妻が昭和 52 年５月に過労で、突然目に見えるものがはためいて、白黒画面となったのです。医者に診てもらうと、血圧が高くなり過ぎているとのことでしたので、私は健康のためにテニスをしてみてはどうかと勧めました。

しかし、台風のためクラブのコートがないので、市営コートを出勤前の 6 時から 7 時まで借りてやっているうちに、妻は面白くなって「一度でいいから一日中テニスをやってみたい」と言うほどになっていました。

話を元に戻しますが、そんな状況でコートに不自由している時「一宮に持っている貸家の隣の空き地をテニスコートにすれば、コートが無くて困っている人々にも喜ばれるし、一石二鳥だ！」と思いつきました。

妻に話すともちろん大賛成で、母も子供たちも賛成してくれました。そんないきさつで今で言うボランチアで造ったのが、一宮テニスクラブです。

そして、昭和 52 年の暮れに工事が完成し、同 53 年元旦にオープン。一家も貸家を増改築して、一宮に移り住みました。

私たち夫婦は公務員のため、クラブを経営するつもりは無く、一会員となって、高知ローンテニスクラブでやっていたように、経営者と管理人が居ない、会員がいつでも使えるテニスクラブとしたのです。